

共同研究 ● グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究

本稿のねらい

本共同研究会の目的は、サブスタンス(身体構成要素)を手がかりとして、人や集団にとってのつながりのリアリティを生み出す感覚、身体性、物質性について考察し、自然と文化の境界領域とその揺らぎを捉えようとするものである。また、人格や性質をもって交換、贈与されるサブスタンスが、現代では特定の文脈において、医療化、政治化、商品化される資源となっていることにも注目し、サブスタンス論とグローバルな現代的現象との接合を図ろうとするものである。

人類学で用いられてきたサブスタンスという概念は、血や骨、肉、体液といった身体物質にとどまらず、食べものや家畜、土地などの諸物質まで含まれる幅広いものである。ただ、こうした多義性が、サブスタンスという概念を理解する際に一種の分かりにくさをもたらしていることは否めない。ここでは、サブスタンスがどのような研究領域と接合していくのか、あるいは、サブスタンスから見ることで、どのような領野が広がるのかということ、これまでになされたいくつかの報告を振り返りながら、サブスタンス論とサブスタンス研究という2つの軸を提示し、いくつかの系に分けて整理してみたい。

サブスタンス論に関わる研究系

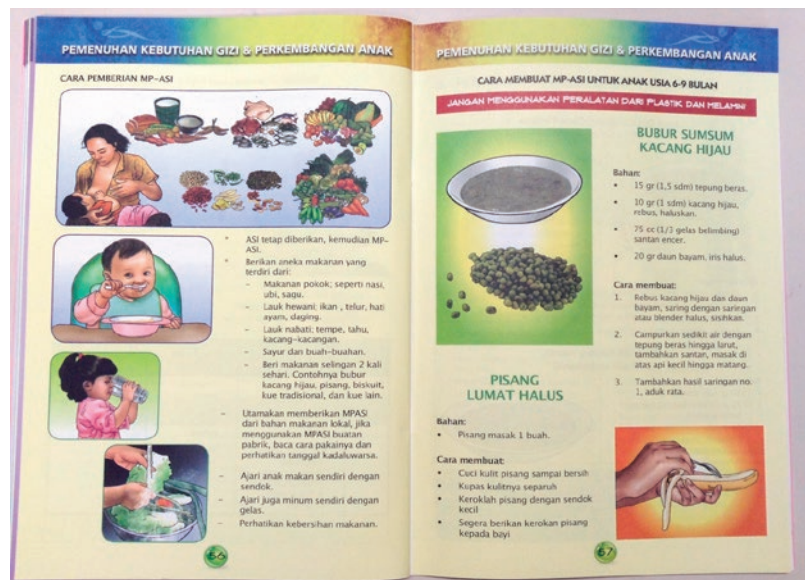
サブスタンス論は、新しい親族研究と呼ばれる分野に出自を持つ。生物学的つながりを自明のものとしてきた親族研究への批判から出発し、共食や共住、交換を通して家族、親族になっていくプロセスとしての社会関係を重視する立場の研究者によって論じられてきた研究領域である。そのうち、とくにサブスタンスの後天的獲得を通じた社会関係の生成・構築を重視する立場を、この分野の旗手であるジャネット・カーステンのrelatednessという語を借用して、「つながり系」としよう。この研究では、飲食実践や養育慣行、儀礼的交換などが検討の対象として浮かび上がる。

2016年度の研究会で深川宏樹(兵庫県立大学)が「血が否定される時——ニューギニア高地におけるサブスタンス紐帯とその切断」で報告したのは、エンガ社会における葬儀時の死者の母方クランによる父方クランへの贈与の要求と、父方クランによるその否定であり、母と子のつながりという特定の紐帯を切断しようとする交渉についてである。そこで明らかになるのは、クラン内の血縁がサブスタンスによる紐帯、それに基づく交換、そしてその切断という緊張をはらんだ交渉の中で再生産されているということである。

また、山崎浩平(京都大学)は、2017年度の研究

会で行った「乳とちぎる——インド・グジャラート州におけるつながりの構築・維持・断絶」という報告で、ヒジュラのコミュニティでの、「母娘」の契りを結ぶ牛乳飲み儀礼の分析を通じ、疑似的親子関係の構築において重要となる乳の象徴的役割を考察した。ヒジュラという生殖に関わらない人たちにとって、つながりを作り出すものは、ともに暮らし、生活を支えあうという日常実践とともに、インド社会において女性の性的流体のなかで最も重要な乳の授受なのである。

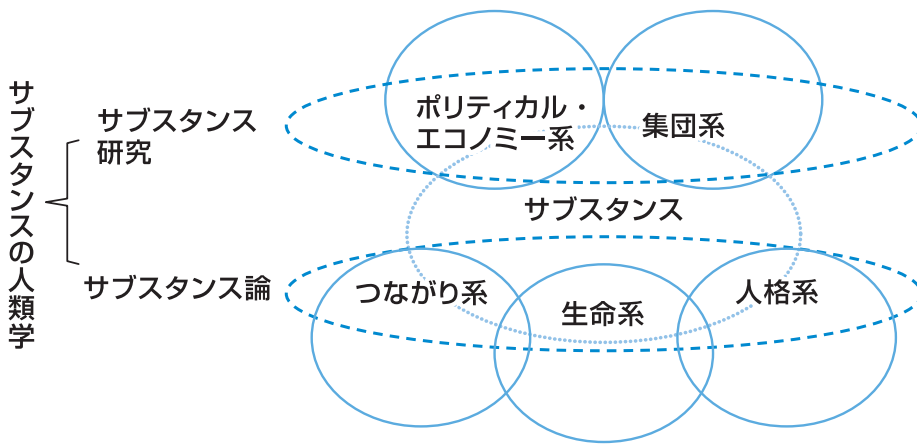
親族研究という出自を共有し、上のつながり系研究と重なるものに、シュナイダーが提起した「血」の概念の自然化への批判を踏襲しつつ、民族や文化によって多様な人間形成の知識や



インドネシアの母子手帳に描かれた理想的な離乳食。母乳とともに、離乳食も子どもの身体をつくる重要なサブスタンスとなる(松岡悦子提供、科研費(B)「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究」の成果)。



チェンマイ近郊の村の新築儀礼で村人にふるまわれる祝いの料理。共食はサブスタンスを考えるうえで重要な実践である(2014年、松尾瑞穂撮影)。



サブスタンスの人類学概念図

あり方を問う民俗生殖論や身体論の方向性もある。生殖という生物学的事実に基づく出自観念を相対化し、生命観や身体観といった象徴と意味の体系を検討する研究は、「生命系」とでも呼べるものである。

田所聖志(秋田大学)が2016年度の報告「地下の油と食べ物油脂を結びつける語りについて」で行ったのは、パプアニューギニア高地の人々が持つ、血と脂からなる身体という身体観と、油田開発が進むなかで人々が抱いている、土地の油とのアナロジーの検討である。田所は、どちらの脂/油も健康(人にとっての健康と土地にとっての健康)という概念と結びつき、環境(世界)を構成するものとして関連しあっている可能性を指摘する。

このサブスタンスの連関によって成り立つ世界をもっとも明示的に描き出したのが、ヴァレンタイン・ダニエルによるインド・タミル農村の民族誌であろう(Daniel 1987)。そこで描かれているのは、土地、食、個人の身体、親族、カーストのサブスタンスが人や自然物を循環し、混濁しあいながら、その性質を変容させつつそれらを作り上げる流動としての世界である。深川は、ここで描かれているのは、土地や家屋などの物が、人と異なりながらも「人である」ことだとし、「われわれは人格と物格、生物と無生物の線引きを変えなければ、この記述についていくことはできない」と述べる(2018: 62)。こうした非人間を含む多様なエイジェントに人格を認め、それらの交換を通して人格が作り変えられていくという可変性に重きを置く研究を、「人格系」としよう。

サブスタンスの語源はラテン語のsubstantiaに由来し、それは「存在、本質」という意味を持つ。それゆえ、ともすれば変わらないものとしてのサブスタンスという本質主義的なサブスタンス観に陥る可能性がある。事実シュナイダーの議論も、不変のサブスタンスと可変のコードの分離が肝になっており、あくまでもコードとの関係において意味を持っていた。人格系はサブスタンスそのものも不断の変化を遂げる流体であるという点を示すことで、サブスタンス概念の外延を広げたといえるだろう。

これら3つの系は、グラデーションをもちながら重なりあい、サブスタンス論を構成してきた。しかし、宇田川妙子(民博)は、2016年度の報告「サブスタンスのリアリティ？」において、親族研究、サブスタンス論がともに「生殖」や「始まり」と強く結びついて発達してきたことを指摘し、それがサブスタンスと親族関係を関連付ける前提をなしてきたことに危惧を示す。そのうえで、ある物質がある特定の文脈においてサブスタンスに

なるプロセスに着目し、生殖、身体、親族などが同語反復的に形成される構造こそを解きほぐす必要性を主張した。これは、今後、研究会で考えるべき重要な指摘である。

サブスタンス研究

他方で、従来のサブスタンス論とは位相が異なるものとして、サブスタンスの物質性により焦点を当てる研究群がある。ここではそれらをサブスタンス論とは区別して、「サブスタンス研究」と捉えよう。そのうち、医療人類学や政治哲学の視座から、グローバル資本経済のもとで、サブ

スタンスが資源として成立、流通、消費される動態を論じる研究を、「ポリティカル・エコノミー系」とする。取引される臓器や配偶子、遺伝情報、輸血や献血、母乳バンクなど、サブスタンス論とまったく無関係とはいえないものの、必ずしもその射程ではない現象を対象とする研究が相当する(cf. Copeman 2014)。ここではサブスタンスは、ダニエルが描いたような、環境や諸物質との間での不断の交換からなる連続性から分断され、象徴性を帯びたマテリアルとしての側面を強めることになる。

また、サブスタンスは、親族という集団だけでなく、民族や人種というより大きな社会的カテゴリーの生成や維持、差異化とも関わっている。そこでは、いかにサブスタンスを通して想像のコミュニティが「本物らしさ」「自然らしさ」を獲得し、実体化していくのかが問われている。こうした研究をひとまず「集団系」とくくっておこう。民族や人種の研究は数多くあるが、それにサブスタンスという視点からアプローチする点が新しく、今後の研究が期待されるものである。

これまでの研究会で明らかとなったのは、サブスタンス論の見取り図と射程である。ここでは便宜的に3つの系に分けたが、それらが重複しあいながら作り出す研究領域は、文化と自然について再考を促すものである。その一方で、サブスタンス論とサブスタンス研究との接合は依然としてクリアではない。今後は隣接分野の専門家を外部講師として招聘するなどして、議論を深めていく予定である。そのうえで、最終年度となる来年度に向けて、サブスタンス論とサブスタンス研究を内包するサブスタンスの人類学の構築に向けた可能性を探っていく。

【参考文献】

深川宏樹 2018「人格と社会性」前川啓治・箭内匡・深川宏樹・浜田明範・里見龍樹・木村周平・根本達・三浦敦著『21世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』東京：新曜社。
 Copeman, J. (ed.) 2014 *South Asian Tissue Economies*, N.P.: Routledge.
 Daniel, E. V. 1987[1984] *Fluid Signs: Being a Person the Tamil Way*. Berkeley: University of California Press.

まつお みずほ

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授。専門は文化人類学。リプロダクション、ジェンダー、生殖医療について研究を行っている。著書に『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』(昭和堂 2013年)、『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』(風響社 2013年)などがある。